



「子どもと公共交通」

京都大学大学院工学研究科准教授 神田 佑亮

先日ある地域で保護者に「移動と子育ての考え方」に関するアンケートをしたところ、普段の移動で「こどもの健康によい移動」、「社会性に富んだ経験」、「我慢や待つ経験」をさせたいという質問に、それぞれ8割移動が「そう思う」という結果が出てきました。こういう移動ができるのは、勿論バスや鉄道等公共交通の魅力です。

実際にバスで出かける一日を考えてみましょう。まずは何時に出かけて、どのバスに乗るか計画を立てる、「プロジェクトマネジメント」が実践できます。そして家を出発し、手をつなぎながら歩く時間ができるとともに、「発育期に必要な運動の機会」も自然とできます。バス停に着いたらバスを待つ、「他人のために我慢して待つ」ことを教えることができます。当然、時間を守らないと乗れませんので、「時間を守る重要性」も教えることができます。バスの車内ではお行儀よくすることは言うまでもありませんが、周りの大人たちが話しかけてくれることも多いでしょう。そういった、「社会とのふれあい」の場も経験できます。最後にバスを降りるとき、実際にお金を払うことで、「金銭感覚」の形成にもつながるでしょう。

「子どもとバスに乗る、電車に乗る」、ふだんの生活や外出の一場面かもしれません。しかしながらこの一場面には、特に若い年代での教育で重視されている「生きる力」を育む環境がぎっしり詰まった宝箱なのです。そして、親子で手をつないでバスや鉄道で移動することで、親も改めて考えるようになり、そして子どもが成長し、また親になったら子と考える、そのような繰り返しで、よりよい人づくりと社会づくりが進む可能性を、モビリティ・マネジメント教育は有しているでしょう。